

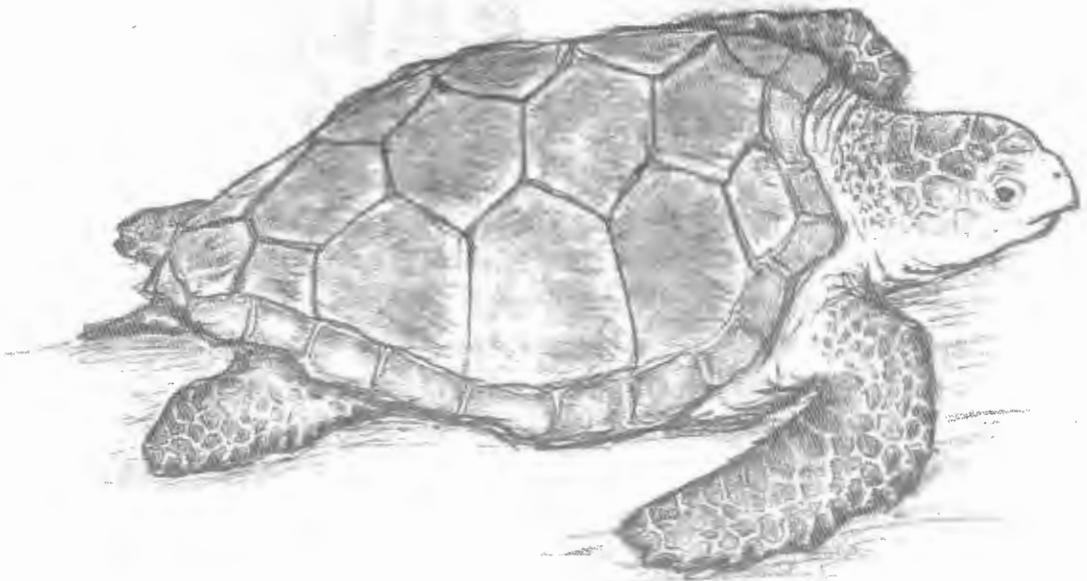
Marine Turtler

マリンタートラ

特定非営利活動法人

日本ウミガメ協議会 機関誌

～第5号～



Contents

マリンタートル列伝 沖縄編その3 亀崎直樹・・・1

今回は座間味島の宮平オジーです。

ウミガメの民俗1 藤井弘章・・・3

民俗学の視点からの新しい連載をお願いしました。

ウミガメ基礎講座5

「ウミガメの甲羅干し」松沢慶将・・・5

京都府丹後半島周辺のウミガメについて 竹田正義・・・7

最近日本海でも調査がされるようになりました。

黒潮生物研究所周辺での活動 田中幸記・・・9

室戸へ研修旅行に行ってきました！

岩田茉莉江 中田史子 山本俊介 岩田まり 福岡幸太郎... 11

事務局より・・・13

調査・研究 ウミガメ生態調査 アルゴスシステムについて・・・15

調査・研究を紹介するページ、アルゴスとは？

マリントラートラー列伝

沖繩編その3

亀崎直樹

沖繩島から船で3時間ほど西に向かうと慶良間諸島があり、その美しい島々の中央に座間味島があります。第二次大戦での悲しい出来事があった島ですが、今では、それを封印したようにダイビング

とホエールウォッチングで賑わっています。この島で何かと有名なマリントラートラーが宮平秀幸さんです。座間味島の周囲には、いくつかのウミガメが産卵する浜があり、それをこの世に紹介し、保護活動を続けてこられたオジーです。オジーのテ



座間味の展望台にて宮平オジー（左）と筆者（右）

マはイタチでした。過去に外部からネズミ対策として移入したイタチが、島全体に広がって、ウミガメの孵化直前の子ガメを食い荒らすのです。オジーは防護柵をつくったり、卵を移植したりして、戦ってこられました。

私が最近座間味島に渡ったのは、ちょうどウミガメの産卵の季節でした。軽トラにボランティアの若い女の子とスコップを積んで浜に出ました。歳をとったマリントラートラーは沢山おられますが、共通して言えることはどなたもウミガメよりもすばやく浜をあるき、穴を掘られることです。宮平のオジーもさっさか歩き、私とボランティアの女の子は走って付いていくのがやっとでした。

浜に出たときの講釈は、マリントラートラーの重要な要素です。オジーの講釈もそれは艶と味があるものでした。

「ユキちゃん（ボランティアの名前）。（砂浜の陸側に指をさして）見なさい。ムーミンがいるよ。」

その女の子と私は、そっちの方向に眼をやりました。そこには、まるで置かれたように楕円形で一抱えくらいの石があり、その石の表面に眼と口を現すように3つの小さな穴が空いているのです。それは私が昔子供たちに読んで聞かせた絵本のムーミンとは違いました



オジーがムーミンと言った石

が、その顔を持った石のたたずまいは確かにムーミンでした。こっちをみて微笑んでいます。その意外性のある会話に、私は驚き、わくわくし、そして、ちょっと明るくはないユキちゃんの微笑を見逃しませんでした。

オジーはウミガメの産卵した痕跡を探して歩きます。私はいろいろ尋ね、オジーはそれに答えてくれます。

「亀崎さん。これ知ってる？」

オジーは直径7ミリ、長さ2センチの炭を固めたような物を、白い砂の中から拾い上げて、見せてくれました。私は、しばしこの人工物が何かを考えましたが、わかりません。

「これ、火薬。アメリカ軍が艦砲射撃したときの火薬。」

海のほうを指差して、「向こうからね、たっくさん、撃ってきたよ。その時の残り。」

私は以前この島を訪れたときに泊まった民宿「中山」のオーナーに聞いた話を思い出しました。その話は次のようなものでした。

1945年、アメリカ軍の艦隊が近づいてきて艦砲射撃を始めた。日本軍の命令のま

ま、島の人々は二つの防空壕に逃げ込んだ。そして、一つの壕の人たちは集団自決し(させられ)た。私は別のほうの壕にいて助かった。

宮平のオジーは、薄暗くなった海岸でマッチの火をつけ、その小さく黒い人工物に近づけました。人工物は、ポポポと、戦後60年の清算をするように燃え尽きてしまいました。私はしゃべる言葉を失い、何もなかったように歩き始めるオジーの背中を眺めたのでした。

オジーは確かにちょっと変わったオジーなのですが、若い女の子にモテモテです。毎年、ボランティアに調査を手伝ってもらっていますが、女の子しかいません(女の子しか受け付けていません)。少しひがみもあったのですが、このムーミンに火薬、そして「さり気なさ」、がオジーの魅力だと納得ができたのでした。昔、座間味丸の船乗りをしていた頃も大変もてたそうで、ここには書けない自慢話も聞きましたが、オジーの長寿を祈ることとして、まあこの辺で筆をおくことにします。



落ちていた火薬に火をつけるオジー

ウミガメの民俗 1

藤井弘章

このシリーズでは、民俗学の立場から、ウミガメにまつわる話題を取り上げていきます。それにしても、なぜ民俗学なのにウミガメを追いかけているんだ、と思われる方もいらっしゃるでしょう。そこで、最初に、私がウミガメにはまっていった経緯をお話したいと思います。

環境民俗学の先駆者のお一人に野本寛一という先生がいます。あるとき、野本先生が静岡県御前崎町のアカウミガメを取り上げた文章を読みました(『共生のフォークロア』など)。御前崎町には、神が伊豆からウミガメに乗ってやってきたという伝承などがあり、死んだウミガメを葬った「亀塚」などもあります。このような、ウミガメの信仰を、野本先生は、御前崎周辺に多く見られるアカウミガメの産卵と結びつけて考えていました。アカウミガメの産卵に接してきた人々が、基層信仰として、カメを神の使いとみるようになったというのです。しかし、このときは、そんなこともあるのかな、という程度でした。

その後、徳島県を民俗調査で訪れていたとき、日和佐町に立ち寄りました。浜辺から離れた宿に泊まっていたのですが、ウミガメの産卵とやらを見てみようと思ひ立ち、ふらっと出かけました。すると、思いもかけず、一匹のアカウミガメが砂浜に現れたの

です。京阪神方面からの観光客が見守る中、卵を産み、そして夜の海に帰っていくという産卵の一部始終を見ることができました。まったく、突然思い立って見に行ったにもかかわらず、ウミガメの産卵に立ち会えたのです。そのときは、よく分からなかったのですが、これはとても幸運なことであったようです。近くで見ていた神戸から来た人は、3年目でようやく見ることができたなどと言っていました。

このとき、野本先生の著書を思い出し、自分が今までやってきた研究などと照らし合わせて、思いを巡らせました。監視員が、観光客に話し声や光を出すことを規制していた光景は、神を迎える祭りの準備にも似ていると感じました。毎年、夏の夜になると、海のかなたからやって来て、砂浜に上陸して卵を産み、再び海のかなたへ帰っていくウミガメ。このような生物に出会った



アカウミガメの産卵

とき、昔の人々は、不思議な感覚を覚え、神の使いと考えることもあったのではないか。ふと、そう思ったのです。それまでは、海に向こうから神仏がやってきたという伝承を追いかけていましたが、実際のウミガメという生物などを契機として、神仏を感じるということがあったのではないかと思ったのです。

このような体験から、抽象的な伝承を追いかけるのではなく、具体的なウミガメと人々とのかかわりを追いかけることによって、日本人の宗教民俗を考えてみようとし、さっそく勉強を始めたのです。和歌山市の出身であったため、比較的通いやすい紀伊半島南部を集中的に調べ始めましたが、出てくる話は、ウミガメを食べたというもののばかりでした。同じ県であっても、ウミガメを食べることなどはまったく知らず、予想もしていなかっただけに、かなりショックでした。歴史学を学んでいたため、江戸時代の古文書を調べることもしましたが、やはりウミガメを食べていたという記録が出てくるのです。宗教民俗を考えたい私としては、選んだ対象が間違っていたのか、とも思いました。しかし、よくよく考えてみると、「食べる」という行為は、神仏を取り込む、神仏と一体化するという意味合いもあるのです。少なくとも、ウミガメは単なる日常食とは言い切れないようです。そこで、ウミガメを食べる＝残虐などという固定観念を捨てて、むしろ積極的にウミガメを食べてきた歴史についても調べるようになりました。すると、次第に、カツオの大漁を呼び込むためにウミガメを突く、などという地域があることなどが分かってきました。また、ウミガメを絶対に食べないという地域や家系があることも分かってきました。さらに、大漁を祈って、網にかかったウミガメに酒を飲ませて放す地域もありま

した。同じウミガメをめぐる、時代や地域によって、さまざまなかわりかたが存在していたということが分かってきたのです。このように、研究対象と方法を宗教民俗のみならず、環境民俗に広げていくことで、思考の幅も広がりました。

古代から現在までずっと、日本列島のすべての地域で、ウミガメを神の使いとし、食べることはなく、守ってきた、ということではありません。先入観を持たずにさまざまな時代や地域のウミガメとのかかわり方を見つめなおすことは、これからの私たちとウミガメとのかかわり方を探っていく手がかりを与えてくれることにもなると信じています。

ここまで、ウミガメの民俗を調べてくることができたのは、亀崎直樹氏はじめ日本ウミガメ協議会の方々から、さまざまな情報提供をいただいたからです。この場を借りてお礼申し上げるとともに、今後もウミガメの民俗ネタをお教え下さいますようお願いいたします。

.....
・ 藤井弘章 (ふじい ひろあき)。1969年、和歌山市生まれ。大阪市立大学にて歴史学を学び、京都大学大学院人間・環境学研究科に進学。宗教民俗・歴史民俗・環境民俗を対象として研究を行いながら、地元の和歌山県において、自治体史編纂などにもかかわる。博士課程に進学してから、ウミガメに出会い、ウミガメの民俗を追いかけることになる。2002年に「日本人とウミガメをめぐる環境民俗学的研究」と題する論文を京都大学に提出し、学位取得。2003年から国学院大学日本文化研究所の専任講師(民俗学、任期制)として採用される。現在、愛知県から単身赴任中。
.....

ウミガメ基礎講座 5

「ウミガメの甲羅干し」

松沢 慶将

新緑の季節、微風を受けながら、力強さが戻ってきた陽射しを浴びるのは心地よいものです。爬虫類が心地よさを感じるかどうかは知りませんが、彼らの多くは積極的に「日光浴 (basking バスキング)」をします。例えば、公園の池でカメが石や木の枝の上に乗って所狭しと並んで甲羅干ししているのはおなじみの光景でしょう。海で暮らしているウミガメはどうかというと、実は彼らも甲羅干しをします。アカウミガメやヒメウミガメがベタ風の海面に浮かんでいることが見つかることもありますし、もっと積極的な例では、ハワイのアオウミガメは産卵するわけでもないのに砂浜に上がって甲羅干しをします。時には海水浴客で賑わう砂浜に上陸してきて周囲を驚かせることもありますし、アザラシと一緒に仲良く「お昼寝」をすることもあります(写真:イメージです)。水着をまとった女性の傍でお昼寝な

らうらやましい限りですが、さて、ウミガメも含めて爬虫類は一体何のために日光浴をするのでしょうか？

一般的には、爬虫類の日光浴は体温調節のための行動と考えられています。そもそも、全ての動物の生命活動は、体内での複雑な生化学反応から成り立っており、その多くは、生存可能な温度範囲では温かいほど速く反応する性質があります。したがって、体温が高いほど活動性が高くなります。哺乳類や鳥類は、大量の熱を発生させたり、時には血管を拡張したり汗をかくなどして、体温を生理的に制御していますが、爬虫類にはそのような機能がないので、寒くなって体温が低下すると活動性が鈍り、食べた餌もろくに消化できなくなります。そこで、体温を上昇させる必要があるときには日光浴をしたり、温かい岩の上などでじっとす

るなどの行動をとるというわけです。アオウミガメの場合、日光浴をして体温を高く維持することで、例えば産卵期のメスが卵の育成を早めたり、フィプロバピロマと呼ばれる皮膚病に罹っている個体が免疫力を高めたりするのに効果があると考えられています。

しかし、アオウミガメが砂浜に上陸して日光浴する目的は、体温調節ばかりではないかも知れません。例えば、執拗に交尾を迫るオ



黒柳理事による撮影

スから逃れるためとする説もあります。実際、アオウミガメでは上陸して日光浴する個体の多くは産卵期のメスですし、稀にオスをのせたまま上陸してくる個体もいるぐらいですから、セクハラ回避目的で上陸してくる個体もいるのかもしれませんが。はたして、メスが砂浜に上陸してまで交尾を避ける必要があるのかどうかは不明ですが、仮に本当だとしたら、それはメスが積極的にオスを選択していること意味するわけで、興味深い新事実です。その他にも、アオウミガメが砂浜に上陸するのは、サメから逃れるためだとする説もあります。特に、イタチザメの消化管からは数多くのウミガメが見つかっていますし、サメに襲われた傷跡のあるウミガメは頻繁に見かけますから、野生でのサメの捕食圧は相当なものでしょう。ハワイでは、夜間にも砂浜にアオウミガメが上陸するのですが、これはイタチザメが夜行性であることに対応しているからだとする意見もあります。いずれにしても、回避行動として砂浜への上陸を進化させるには十分かもしれません。

このような効果が指摘されているウミガメのバスキングですが、興味深いことに、アオウミガメ以外の種では砂浜に上陸しませんし、アオウミガメの中でも限られた地域でしか確認されていません。これまでアオウミガメが砂浜に上陸してバスキングしているのが頻繁に見つかっているのは、ハワイ諸島、ガラパゴス諸島、オーストラリアのカーペンタリア湾やグレートバリアリーフ南部などです。(最近ほとんど見つかりませんが、小笠原でもかつては観察されたようです。) 例外的に、南大西洋の英国領アッセンション島や、最近ではメキシコ湾のドライトルチュガス諸島でも目撃例がありましたが、極めて稀です。このような行動が、なぜ限られた地域のアオウミガメだけに限られているのか、十分な説明はいまだなされていません。

.....なんてネタを、この夏、親しい人と一緒にプールサイドや砂浜で仲良く甲羅干しした時に披露しては如何でしょうか？嫌がられるのを覚悟の上で。ははは。

～前号のクイズの答え～

前号で、以下のような出題をいたしました。

「ごく稀な例ですが、メスの産卵、アオウミガメの甲羅干し、低温仮死状態個体の漂着の三つの状況以外にもウミガメが生きて砂浜に上陸することがあります。それはどんな場合でしょうか？」

これに対して、「上陸して寝る」などの回答が寄せられましたが、正解は、産卵のために上陸するメスの背中に乗っかっていたオスが、メスに引きずられる場合と、オスが自分が産卵できると勘違いして上陸した場合です。前者の場合、上陸後まもなくオスは引き返すので、積極的な上陸とは言えないかも知れません。オスがメスの通常の産卵行動と全く同じ行動をとる例は極めて稀ですが、飼育下でも野外でも観察されていて、いわゆる環境ホルモンの影響だと考えられています。

ご回答を頂いた方々ありがとうございました。

日本におけるウミガメの産卵地が主に太平洋沿岸であることは一般的によく知られています。それら全国の各産卵地では、地元住民あるいは研究者によってウミガメに関する各調査が継続的に行われています。それに対し、日本海沿岸におけるそれらの情報は冬期の漂着例を含めても極めて少なく、日本海に來遊するウミガメの実態はほとんど分かっていないのが現状です。日本海には、一体どんなウミガメがどれだけいるのでしょうか。この謎を明らかにするために、私は2003年4月より、京都府北部の丹後半島周辺において、地元住民や各漁業協同組合の定置網（湊宮（みなとみや）、浜詰（はまづめ）、三津（みつ）、竹野（たかの）、袖志（そでし）、蒲入（かまにゅう）、本庄浜（ほんじょうはま））を対象に、ウミガメに関するヒヤリング調査を行っています（図）。そして、2004年4月現在までの調査の



図 丹後半島と各定置網

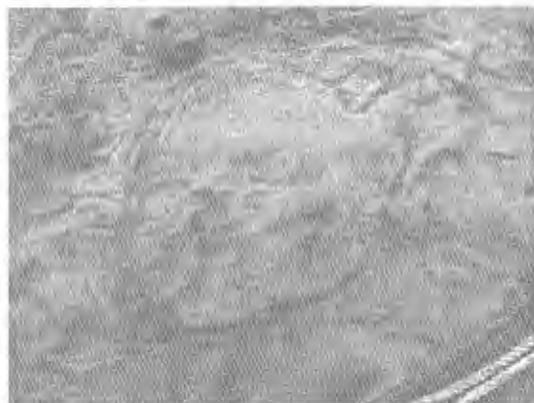


写真1 砂浜に描かれたウミガメ（数年前、箱石浜に上陸していたという

結果、ここ数年でもウミガメが頻繁に目撃されていることが分かってきました。

2004年4月現在までに地元住民から得られた幾つかの情報では、やはりアカウミガメやタイマイの冬期漂着に関するものが多く、中にはオサガメ幼体の死亡漂着例や漂着個体を砂浜に埋めたという情報もありました。また、ウミガメの上陸や上陸痕の目撃情報もあり、これらの情報が正確であれば、稀にアカウミガメが丹後半島の砂浜に上陸あるいは産卵していることとなります。これらの情報

は、当時の記録がないためその真偽を確かめることは困難ですが、同じ情報が複数得られていることや、実際に砂浜に描かれたウミガメ（写真1）、地元住民によって保存されている複数のウミガメの剥製標本（写真2）などから、ほぼ正確な情報と思われる。

2004年1月11日には、鳴き砂で知られる琴引浜に若齢個体のオサガメ（直甲長116

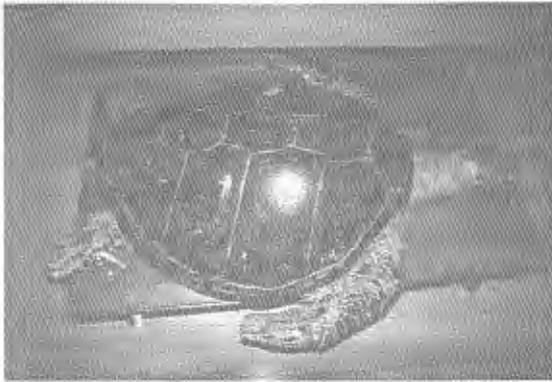


写真2 丹後温泉旅館「はしうど荘」に保存されていたアオウミガメの剥製の標本

cm、直甲長74cm)の死亡漂着がありました。オサガメの漂着例は全国的にも非常に少ないことから、本個体の漂着が貴重な記録となったばかりでなく、地元では次第にウミガメの漂着に注目が集まっているようです。本例は、当初日本海側でよく見られる冬期漂着かと思われましたが、本調査の結果、漂着する数日前に近くの定置網(浜詰)に迷入していたことが分かり、その際に溺死した可能性が示唆されました。

さて、各定置網(図)からも多くの情報が得られました。得られた情報は、漁協の方々の豊富な経験に基づくもので、定置網で混獲されるウミガメの特徴(甲羅の形状・色調、個体サイズ)や混獲される時期など、どれも具体的な情報ばかりでした。今回調査した7ヶ所の定置網では、浜詰や袖志の定置網を中心に全ての定置網で年間数頭のウミガメが混獲されていることが分かりました。定置網に迷入するウミガメは、混獲頭数が多いと思われる順に、アオウミガメ、アカウミガメ、タイマイ、オサガメの4種類で、アオウミガメは若齢個体から成体まで数多く混獲され、アカウミガメは若齢個体から成体まで、タイマイは若齢個体が混獲されていることが分かりました。なお、オサガメの混獲は極めて少

ないと思われました。また、幾つかの漁協で得られた情報の中で注目すべき点は、混獲時期が夏から秋にかけて多いこと、定置網の漁獲量の多い年にはウミガメの混獲頭数も多い傾向にある、ということです。これは、日本海におけるウミガメの来遊が海の環境的要因(水温、海流など)と深く関わっていることを示唆しています。

以上のように、丹後半島周辺の海域では、主にアオウミガメ、アカウミガメ、タイマイが漂着あるいは定置網に迷入し、数多く目撃されていることが分かりました。これらの結果は、ウミガメが同半島周辺の海域を、産卵場や索餌場、あるいは回遊ルートとして利用している可能性を示唆しています。丹後半島は浦島伝説の発祥地と言われています。その周辺海域で、ウミガメが目撃されていることは大変興味深いことです。今後も、丹後半島周辺におけるウミガメの定置網への迷入、冬期漂着、上陸・産卵に注目し、継続的に情報を収集・蓄積していく必要があります。太平洋側と比較すると情報が極端に少ない日本海側ですが、実は各地域にはウミガメに関する情報がたくさん眠っているのかも知れません。日本海側のそれらの情報が、ウミガメの生態解明や保護に寄与することを願っています。

.....
 ● 竹田正義 (たけだ まさよし)
 ● 1975年生まれ。近畿大学農学部水産学科
 ● 卒業。1997年より城崎マリンワールドに
 ● て、ウミガメ担当となる。2001年に丹後
 ● 半島に漂着したタイマイとの出会いを
 ● きっかけに、同半島周辺のウミガメ類に
 ● 関心をつ。現在、同水族館にて丹後半島周
 ● 辺のウミガメ類の見聞調査、保護飼育を
 ● 行う傍ら、ライフワークとして休日には
 ● ビーチコーミングや海浜植物観察を行っ
 ● ている。
 ●

黒潮生物研究所周辺での活動

田中幸記

こんにちは、高知県の黒潮生物研究所でマリントートルをやっている田中です。黒潮生物研究所は高知県から認可を受けた財団法人で、大阪にあるステラケミファ株式会社とその社長からの社会貢献を目的とした寄付によって運営されています。国や県などから委託された調査・研究の他、研究所職員がそれぞれのテーマで研究を行っており、クシハダミドリイシという造礁サンゴの増殖技術と生殖に関する研究や、八方サンゴの生育環境に関する研究や、周辺の海藻相に関する研究など、様々なことに取り組んでいます。その中で私は、マリントートルとしての活動を行っていますので、今日は研究所周辺でのウミガメに関する活動について紹介したいと思います。

当研究所から東へ30kmほど行くと、足摺岬があります(図)。本誌第4号で、高知県の室戸岬近くの定置網で行われているウミガメの混獲調査のことを協議会の若月さんが紹介されていましたが、足摺岬周辺の定置網でもウミガメが混獲されることがあります。漁師さんから電話で「イソガメが捕れちよるぞ。港までとりに来い!」と連絡を受けると、飛んでいって標識を付けて放流しています。イソガメとは地元の言葉でアオウミガメのことです。この辺



図 黒潮生物研究所の位置



写真1 定置網漁の様子

りで捕れるウミガメは、主にアカウミガメとアオウミガメで、年に数回はタイマイが捕れることもあります。私もしばしば定置網漁に同行させていただいて、捕れたウミガメに標識を付けて船の上から放流しているのですが(写真1)、先日同行した漁の時には1回の網で15頭ものメスのアカウミガメが捕れ、船がカメでいっぱいになりました。また、昨年の春に足摺岬近くから放流したメスのアカウミガメを人工衛星を使って行動追跡したところ、夏に徳島県の浜まで行って産卵しましたので、足摺岬周辺から標識を付けて放したアカウミガメが、今度は読者のみなさん

が調査されている浜に産卵に行く可能性もあります。どこの浜から産卵したという連絡をいただけるか、楽しみに待っているとこです。

アカウミガメの産卵地として高知県西南部の海岸線を見てみると、切り立った崖や、ガラガラとした石や礫の浜が多いため、ウミガメが産卵できるような浜はあまり多くはありません。しかし、土佐清水市の「大岐の浜」や大方町の「入野の浜」といった砂浜では、アカウミガメが毎年数十回産卵しています。大岐の浜では溝渕幸三さんと岡田幸生さんというマリントーターが、地元の中学校の子達と一緒に十数年間にわたりウミガメの調査と保護を精力的に行っておられます。「入野の浜」で長年ウミガメの活動をされてきた松下晴嘉さんは一昨年に残念ながらお亡くなりになりましたが、現在は吉村脩さんがその後を継いでタートルとしてがんばっておられます。こういったマリントーターたちや、研究所や水族館の職員が集まって、「土佐遊亀会」という会を昨年の春に作りました。この会は、それぞれの浜のウミガメの産卵状況や産卵地として直面している問題などを話し合い、情報ネットワークを作ることを目的としてできたものです。会ではウミガメの産卵シーズン前と後の年2回、飲み屋の一室に集まってお酒を飲みながらにぎやかにウミガメの話をしています(写真2)。室戸からも協議会のスタッフの方が毎回参加しておられ、今後はもっといろんなタートルが集まって話ができる会になればと考えています。ウミガメや浜について語りた方、高知のお酒が飲みたい方は、ぜひ会に参加してみてください。

また、黒潮生物研究所では学生や外来研究者の受け入れも行っており、周辺の照業

樹林の山々や、美しい造礁サンゴの海をフィールドにした研究ができます。宿泊室や研究所の備品などを利用することもできますので、詳しくは下記のホームページをご覧ください。



写真2 2003年の土佐遊亀会メンバー

後列向かって左から田中幸記(黒潮生物研究所)、若月元樹(日本ウミガメ協議会)、京谷直樹(足摺海洋館)

前列向かって左から、溝渕幸三(中村市)、岡田幸生(土佐清水市)、尾原早苗(日本ウミガメ協議会)、吉村脩(大方町)

黒潮生物研究所・土佐遊亀会事務局

〒788-0333 高知県幡多郡大月町西泊560番イ

電話 0880-62-7077 FAX0880-62-7078

Eメール: mail@kuroshio.or.jp

ホームページ: http://www.kuroshio.or.jp

田中幸記(たなか こうき)

1978年生まれ。大学生時代に鹿児島島の
吹上浜でウミガメと出会う。沖縄のマ
リンスクールで、髪をハート型に刈り
込み、小学生と遊んでいたところを現
職場の上司にスカウトされる。

室戸へ研修旅行に行ってきました！



左から、岩田茉莉江、岩田まり、中田史子、笠井優介（日本ウミガメ協議会室戸駐在）

昨年の夏から2月まで、事務所でインターンシップをしていました中田史子です。友達と一緒に2月17日から2泊3日で、室戸フィールドにお邪魔させてもらってきました。事務所でインターンシップだけで、現場をあまり知らない私にとって、室戸では、とても貴重な体験をすることができました。全部で3回漁に参加させてもらい、2回目の漁では、2個体の混獲現場にも立ち会うことができ、全部で4個体に標識つけ&計測をさせてもらいました。地元へ溶け込んで調査する大切さや、データを得る大変さ、データの重さなどいろいろなことを学ぶことができました。漁体験も新鮮で、室戸のお魚もおいしく、とても楽しかったです。 中田史子（神戸大学発達学部4年）

たった2泊3日の研修でしたが、今から思い出しても中身は大変濃い充実したものでした。今まで、新しい地で短期間でこれほど地元の人と近くなったことはなかったでしょう。これからも室戸らしいホスピタリティを持ち続け、訪れる人を魅了し、漁とウミガメ調査のすてきな関係を知る人が多くなればと願っています。

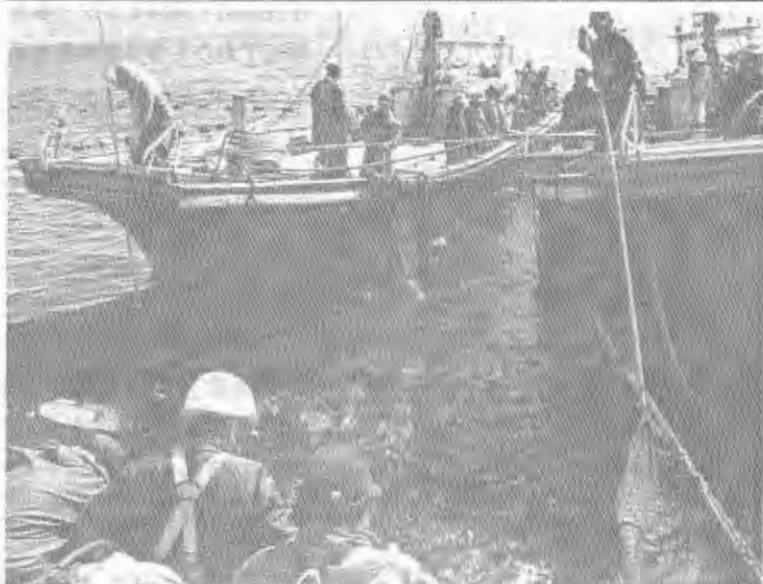
岩田茉莉江（京都女子大学院現代社会学部4年）

室戸で実際に見た当初は、莽猛で恐ろしいとさえ感じたウミガメも、時間の経過とともに愛らしさも感じられるようになりました。漁自体も、思い描いていた通り、波に揺られながらのチームプレーといった様で、とれたての魚をふるまってもらったりもして朝から幸せなひと時を味わわせてもらいました。 山本俊介（大阪大学法学部3年）

ウミガメ調査に参加して、ウミガメが野生動物だなと実感しました。実際のウミガメは力も強いし、嘴のような口や頑丈な爪も持っていて、たくましい動物である事を感じました。また、海という自然にとっても密着して生活する漁師さんの暮らしが見られたことも、印象的でした。漁は想像していたよりも大規模で、スゴイスゴイ！と興奮しっぱなしでした。とてもいいチームプレーで何よりとても楽しそうに働いていたのが印象的でした。 岩田まり（京都大学総合人間学部4年）

室戸で、調査員の笠井さんは漁に参加し、漁師さんの生活に密着し、漁師さんとの関係を大事にしているのだなと思いました。漁の手伝いとかをしているその姿はウミガメの調査員というより、漁師さんそのものでした。ウミガメ調査に関わらず、何をやるにしても大切なことは人間関係であって、いかに人から信頼を得られるかだとかさいさんに教えられました。

福岡幸太郎（京都大学総合人間学部3年）



漁の様子

事務局より

日本ウミガメ協議会会計報告（平成15年度）

平成14年11月1日より平成15年10月31日

単位：千円

収入の部	
会費	1,740
助成金・補助金	21,837
事業委託	28,226
ウミガメ会議参加費・協賛金	3,590
寄付金	1,183
その他	14,465
収入の部合計	71,041
支出の部	
自然環境保全事業（調査・研究費）	24,223
小笠原海洋センター運営事業	22,008
八重山海中公園研究所運営事業	8,490
ウミガメ会費開催費	3,888
情報提供事業（遊覧・会報）	208
うみがめニュースレター発行支援	100
管理費（人件費・事務所経費等）	10,395
支出の部合計	69,312
当期収支差額	1,729
前期繰越収支差額	7,989
次期繰越収支差額	9,718

各費目の内、主なものは次のとおりです。

助成金・補助金収入	単位：千円
東京都小笠原村	12,504
環境事業団地球環境基金	2,733
WWF・日興グリーンイバスターズ基金	1,300
経団連自然環境基金	1,100
WWF J・自然保護助成金	900
損保ジャパン環境財団助成金	600
事業委託収入	
日本ベッ甲協会タイマイ保護事業	9,500
環境省ウミガメ行動追跡調査	9,026
小笠原村・海洋センター事業	5,142
明石アカウミガメ追跡調査事業	3,000

ご寄付をいただいた方々

ご寄付をいただいた下記の方々に厚くお礼申し上げます。

エイ出版社、ガンパNPO匿名1件、藤野英輔、溝淵幸三、土田精一、護得久明美、深田勉、木本充映、前田直美、小島あずさ、井上祥夫、大地昭、波多野真樹、松本亜芸子、森田和夫、浅海美幸、野村直人、石山哲郎、伊藤栄美、高知大学農学部応用微生物研究室、パタゴニア大阪、栗村知里、庄子満彦、照屋秀司、佐野祐介
 順不同、敬称略、4月30日まで

八重山海中公園研究所発行の 「うみがめ〜る」が創刊しました。

本誌は毎月、黒島の全世帯と入館者に無料配布されます。島外の方で定期購読を希望される方は黒島に引っ越すか、毎月研究所に遊びに来てください。どうしても郵送による定期購読を希望される方は、研究所支援金として3,000円の定期購読費を申し受けます。購読を希望の方は研究所（電話：0980-85-4341またはymprs@umigame.net）までお問合せください。（黒島研究所・若月元樹）



八重山海中公園研究所の名称変更について

旧財団法人海中公園研究センターから引き継ぎ、日本ウミガメ協議会が運営しております八重山海中公園研究所は、4月1日より『日本ウミガメ協議会附属黒島研究所』に名称を変更しました。また、1月1日より所長代理を島達也より、若月元樹に引き継ぎました。この4月からは、黒島研究所勤務職員として、成瀬貫（なるせ・とおる、沖縄の淡水性のカニの分類が専門）を採用しました。今後はより充実した運営を心がけてまいりますので、引き続きご利用、ご愛顧の程をお願い致します。

事務局附属作業室（仮称）の開設について

年々蓄積する標本や資料の保管と、簡単な分析、作業などを行なうための作業室を開設します。現事務局の向かいにあるビルに空室があったことから、ここを借りることにしました。広さは約15坪で、室内にガス、水道の設備もあり、2台程度の駐車場もあります。会員の方のご利用もできますので、ご利用を希望される方はどうぞお問い合わせ下さい。

協議会紹介パンフレットについて

日本ウミガメ協議会の活動内容を紹介するパンフレットを作成しました。A3版の4つ折りで、表面はさまざまな活動場面の写真（約70点）、裏面は文章による活動内容の解説を記載しています。ご希望の方には無償で配布いたしますので、お気軽にご連絡下さい。



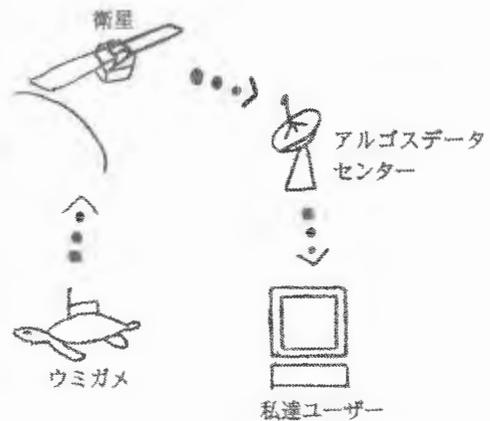
調査・研究

ウミガメ生態調査 アルゴスについて

皆さんは最近よく「アルゴス」という言葉を新聞等で見かけませんか？カメの甲羅につけ放流するシーンが思い浮かぶと思います。アルゴスは他に衛星発信器とも言われており、一言では説明しにくい複雑なシステムになっています。今回は、「アルゴスシステム」について説明したいと思います。

アルゴスシステムとは

アメリカの航空宇宙局 (NASA) アメリカ海洋大気局 (NOAA) 及びフランス国立宇宙研究センター (CNES) の子会社であるCLS社によって共同運営されている、人工衛星を利用したデータ収集システムです。衛星追跡システムのことをアルゴス、と誤解されがちですが、アルゴスは他にもある衛星追跡システムの中の1つです。



イメージ図



アンテナ

空に向かって電波を発します。

磁石

外すと電源が入ります。

ソルトウォータースイッチ

水面上で電波を発信するしくみになっています。

語 源

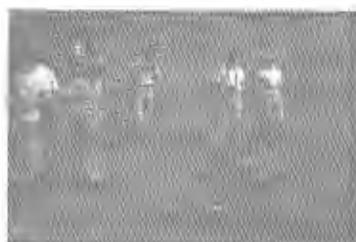
天上から下界を監視しているギリシャ神話のアルゴス (Argos) にちなんでいます。アルゴスは体中に百の目があり、眠りを知らない巨人で、女神ヘラのしもべでした。

利 用

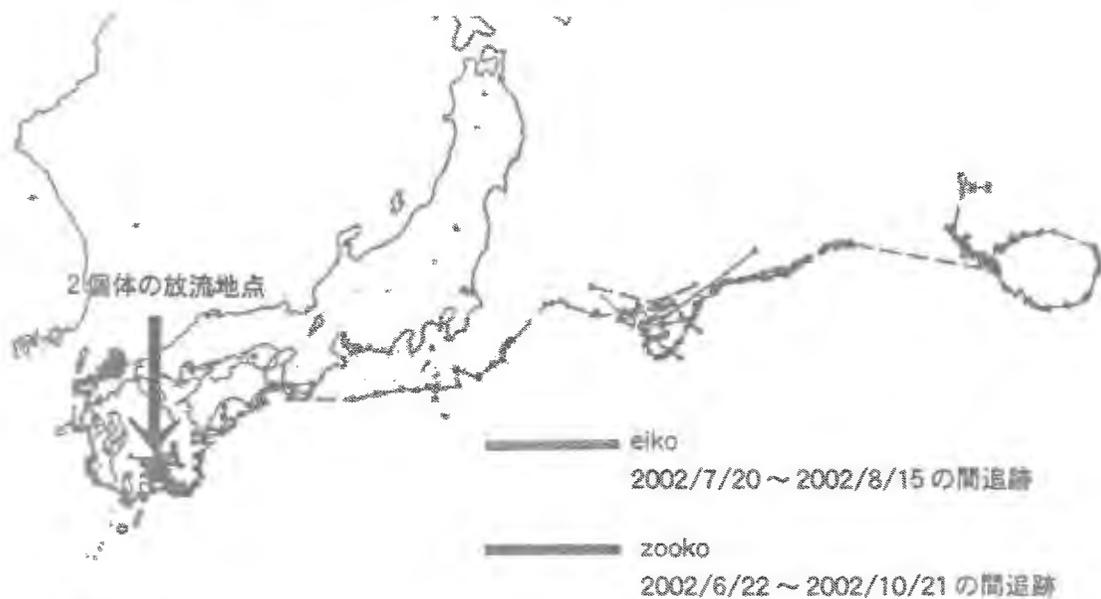
アルゴスシステムは、海洋・気象観測や野生動物の研究 (ウミガメ、アザラシ、イルカ、ペンギン、渡り鳥など) に利用されています。

調 査 例

宮崎野生動物研究会の皆さんと協力して2002年に産卵したアカウミガメ2個体(eikoとzooko) に発信機を装着して追跡しました。



発信機装着風景 (左) とアルゴス個体を放流するところ (右)



放流した個体の航跡図

編 集
後 記

各地からぞくぞくと産卵の報告が寄せられています。今年もいよいよシーズンが始まりました。シーズンオフ中の事務局は、オフとはいうものの何かと忙しくしていました。事務局メンバーで「日頃の疲れを癒すために小旅行に行こう」と密かな計画もされていましたが、どうやら忘れ去られてしまったようです。そうこうしているうちに、あっという間に産卵、孵化が終わって「さあ～また会議だ！」と言っているのが目に浮かびます。皆様、すぐに暑い夏がやって来ますが、お体には気を付けてこの夏も乗りきりましょう。もう6月・・・今回も発行が遅れてしまいましたことを、会員の皆様、筆者の方々に深くお詫び申し上げます。

<編集担当 矢野由紀>

マリンタートラー（日本ウミガメ協議会機関誌）

第5号

発行日

2004年6月13日

発行

日本ウミガメ協議会事務局

〒573-0163 大阪府枚方市長尾元町5-17-18-302

電話：072-864-0335

FAX:072-864-0535

URL:<http://umigame.org>

E-mail:info@umigame.org